



羅針盤

山崎 修

Osamu Yamasaki

島根大学医学部皮膚科学講座 教授



感染症の流行はくり返す

古くから結核、疱瘡(天然痘)、コレラ、ペスト、スペイン風邪などの感染症はパンデミックをくり返している。これは歴史上明らかな事実であるが、COVID-19のパンデミックを体験し、感染症はくり返すことを再認識した。COVID-19感染対策に対する行動変容によって飛沫感染経路を伝播の主体とする細菌群の分離比率は著しく減少した。皮膚細菌感染症も流行状況、生活様式、グローバル化などにより変化している。昨今、ほとんど遭遇しない感染症もあるが、将来再興する可能性はある。

皮膚細菌感染症の分類は、病変の深さ、皮膚付属器との関係、一次性か二次性かなどを基本においている。抗菌薬だけで治癒させることのできる群(単純性皮膚細菌感染症)と手術的侵襲などの抗菌薬以外の治療を加えることによって治癒させることのできる群(複雑性皮膚・軟部組織感染症)に大別する場合もある。起炎菌別では黄色ブドウ球菌とレンサ球菌が中心である。浅在性の場合はこの2つの菌による場合がほとんどであり、診断がつけば経験的な治療を開始できる。しかし、そのほかにも多彩な菌が原因となる多くの疾患がある。

今回の特集では皮膚細菌感染症を起炎菌別にグラム陽性球菌、グラム陰性桿菌、グラム陽性桿菌に大別した。総論ではグラム陰性桿菌とグラム陽性桿菌による感染症について概説し、各論ではそれぞれの代表的疾患の症例提示を執筆いただいた。

グラム陽性球菌は黄色ブドウ球菌とレンサ球菌で *common disease* が中心になる。グラム陰性桿菌は緑膿菌や *Vibrio vulnificus* による感染症、人獣共通感染症である。グラム陽性桿菌は *Corynebacterium* 属、*Nocardia*、*Actinomyces* などによる稀な感染症である。さらに知っておくべき感染症として、新生児 TSS 様発疹症、鼻疽・類鼻疽、ノカルジア症についてエキスパートによる総説を組み入れた。

われわれ皮膚科医には正しい診断のもとに効率のよい経験的な治療選択と正しい抗菌薬の使い方が求められている。稀に遭遇する感染症が、皮膚症状から診断されることも多い。この特集が、通常とは違う切り口から皮膚細菌感染症の整理となり、今後遭遇する可能性がある稀少な感染症の診断の手助けとなれば幸いである。